

**昨** 季はキャリアハイの36試合に出場。J1選手でパス総数が1位と、名実共に新潟の心臓に成長。新潟スタイルを貫く上で欠かせない存在だ。今季加入の落合が「映像で見ていると思ったが、一緒にプレーしてうまいと思った」となるほど技術、パスセンス、状況判断は非凡。ビルドアップからフィニッシュまで関わる。昨季は副主将を務め今季も責任感は十分。「新潟のことは他の選手よりも知っているつもり。上に立ってやっていかないといけない年齢でもあるので、ピッチの上で表現したい」。



写真 / スポーツニッポン新聞社

# AKIYAMA HIROKHI

**秋山 裕紀** **6**

2000/12/9生	176cm 70kg
出生地	群馬県
前所属チーム	鹿児島ユナイテッドFC
Jリーグ初出場	2019/10/19(新潟)
Jリーグ初得点	2020/9/22(沼津)
昨季Jリーグ	36試合出場2得点(新潟)

**加** 入1年目は開幕前からケガに苦しみ、特に前半戦は出場機会が限られた。4ゴールも納得のいく結果ではなかったが、若手を中心に積極的に自身の経験を伝え、精神的な支柱の1人になった。指揮官が替わり、選手も大きく入れ替わった今季だが「うまくいかないこともたくさんあると思うが、自分たちがしっかり土台となって全員でつくってあげれば良い」と率先してチームを引っ張る。「前線の選手が結果を出すことがチームを引き上げていくことになる」とゴール量産も狙う。



# ONO YUJI

**小野 裕二** **99**

1992/12/22生	170cm 69kg
出生地	神奈川県
前所属チーム	サガン鳥栖
Jリーグ初出場	2010/7/18(横浜FM)
Jリーグ初得点	2010/10/17(横浜FM)
昨季Jリーグ	24試合出場4得点(新潟)

## ALB 2025 アルビレックス新潟全選手名鑑 PLAYERS FILE



**新** 潟生え抜きの若き守護神が、栃木SC、ジェフユナイテッド千葉への期限付き移籍で力をつけ、4シーズンぶりに帰って来た。「自分を育ててくれたアルビのエンブレムをつけて、再び戦えることが光栄です」。以前からシュートストップの技術には光るものがあったが、本人が「課題」に挙げていたムラのあるプレーを改善してスケールアップ。今季は背番号1を託された。「新潟を離れた期間で成長したことをプレーで証明したい」。自身初のJ1舞台で真価を発揮する。

# FUJITA KAZUKI

**1** **藤田 和輝**

GK	2001/2/19生	186cm 85kg
出生地	新潟県	
前所属チーム	ジェフユナイテッド千葉	
Jリーグ初出場	2020/6/27(新潟)	
Jリーグ初得点	-	
昨季Jリーグ	24試合出場0得点(千葉)	

写真 / スポーツニッポン新聞社



**東** 洋大学から新加入のスーパールーキー。FC東京U-15深川時代はFWと右ウイング、前橋育英高校でも2年生の夏まで前線でプレー。「攻撃、シュートにも自信はあります」。左足から繰り出すフィードはビルドアップの起点となり、守備はスピードと正確な立ち位置で安定させる。昨年は大学サッカー部の公式戦に出場する傍ら、特別指定選手としてJ1リーグ戦12試合に出場。ルヴァンカップ決勝では120分間ピッチに立ち、力を示した。「新潟で活躍して日本代表に入りたい」。

# INAMURA HAYATO

**3** **稲村 隼翔**

DF	2002/5/6生	182cm 72kg
出生地	東京都	
前所属チーム	東洋大	
Jリーグ初出場	2024/4/27(FC東京)	
Jリーグ初得点	-	
昨季Jリーグ	12試合出場0得点(新潟)	



# 新潟のフェンシング



## 己を信じて突け! 剣の先に見える未来

2024年パリ五輪で金2つ、銀1つ、銅2つ、計5つのメダルを獲得して前回の東京大会以上に世界に衝撃を与えたフェンシング日本代表。男子エペ団体で銀メダルに輝いた古俣聖(新潟市西区出身、本間組所属)の存在が、新潟県のフェンシング界をさらに熱くしている。 撮影・文◎わたなへまさひこ (Office Serendipity)

### 国体やインカレ、 インターハイ優勝者を輩出

フェンシングは相手の体の有効面を攻撃して得点するスポーツ。フルール、エペ、サーブルの3種目がある。フルールは胴体、エペは全身、サーブルは上半身が有効面とされ、突く、斬る、得点方法などルールも異なる。

古俣は新潟第一高校を卒業して中央大学に進み、2023年アジア大会において男子エペ団体で金、エペ個人で銀に輝いている。女子にも新潟県出身でトップレベルの選手がいる。22年世界選手権女子サーブル団体で銅メダルを手にした聖籠町出身の小林かなえ(新潟商業高校卒)。パリ五輪出場は叶わなかったが日本代表サポートメンバーとして帯同し、その後に開催された24年全日本選手権の女子サーブル個人で2位。次回五輪にも大きな期待が寄せられている。そんな日本を代表する選手を輩出する新潟県のフェンシング事情を探ってみた。

新潟県のフェンシング競技人口(24年末時点)は122人。内訳は社会人18人、大学生(新潟大学)12人、高校生77人、小学生15人となっている。日本協会発表に

よると国内のフェンシング競技人口が約6400人(22年)なので、かなり少ないと言える。それにもかかわらず、昨年の古俣聖、小林かなえ両選手の活躍をはじめ、

これまで国民体育大会(現国民スポーツ大会)の成年男子優勝2回、インターカレ(全国大学選手権)優勝2回、インターハイ(全国高校総体)個人優勝5人(6回)、全日本少年団体選手権大会中学生の部優勝1回の実績を残している。優秀な成績を取っている選手に共通していることは、子どもの頃から競技に打ち込み鍛錬を重ねてきたということ。古俣も小林もジュニア(17歳以上20歳未満)やカデ(13歳以上17歳未満)から世界の大会にも出場してきた。

若い年代の育成と競技環境整備の必要性を語るのには、新潟県フェンシング協会の加藤祥理理事長。「全国や海外で活躍するためには、小中学生の年代からの競技開始が必要不可欠。そのためには、練習拠点の確保や競技の認知、始めるきっかけを作ってあげることが重要だと考えています」。加藤理事長自身も小学生で始めた。祖父は新潟高校の初代主将で、両親もフェンシングをやっており、親子三代のフェンシング一家で育った。インターハイや国体で表彰台上った経験を持つ。





# 第45回新潟県高校バレーボール 高校1・2年生大会



男子 決勝

2025.1.27 新発田市カルチャーセンター

## 関根学園、歓喜の初戴冠! 東京学館新潟に逆転勝ち

関根学園が逆転で勝利して県大会初優勝。東京学館新潟の1・2年生大会4連覇(中止された第42回大会を挟む)を阻んだ。決勝の前に行われた北信越大会(2/7~9富山県)のシード決定戦は新発田中央が2-1で上越総合技術を下した。

撮影●嶋田健一(スタジオ嶋田) 文●石井拓馬(フリーランス)

決勝

関根学園 2 [23-25, 25-21, 25-17] 1 東京学館新潟

**下** 鳥連大(2年)のスパイクが決まった瞬間、体育館がこの日1番の歓声に包まれた。関根学園にとって初の県大会制覇。県内屈指のアタッカー竹田尊飛(2年)は「うれしくて、もう自然と。何も考えずです」と勝利の時には、全員がコートに突っ伏して喜んだ。

第1セットは接戦の末に落とした。あとがなくなったが、「取られたら取られた、で切り替え。ミスしたらすぐに切り替え。そういう思いでやっています」と竹田。劣勢でも笑顔でプレーすることを心がけ、第2セットを取り返す。最終第3セットも「本当に自分なんかになって思うぐらい調子が良かった」と絶好調だった下鳥が得点を重ね、

「全然ダメでした」と苦笑いした竹田も要所で流れを呼び込むスパイクを決めた。春日正史監督が「新チームでうちの2枚エース」と称するように、両輪で躍動した。

新たな歴史を刻み、目標の「県3冠」にも1歩前進した。竹田は「次は追われる立場になる。インターハイで全国レベルを実感して、春高につなげる」と気を引き締めた。

東京学館新潟は県主要大会連続Vを「6」で止められたものの、チーム作りはまだ始まったばかり。渡辺健太郎監督は「ワンラリーごとに100%を出せるようにチーム作りをしていきます」と再起を誓った。

### 男子優勝校 関根学園高校



初めて頂点に立った関根学園。県3冠を目指して磨きをかける



下鳥の鋭いスパイクが決まる



ブロックを決めた東京学館新潟の佐藤壮馬(2年)



初優勝を成し遂げて突っ伏す関根学園の選手たち



リベロ松下優大(2年)の確実なレシーブも光った



高い打点から竹田がブロックを打ち抜いた